

ヤンゴン素描 8 カバーエイ・パヤー 世界平和寺の時空

山形洋一

ヤンゴン東部を南北に走る大通りの名前にもなっているカバーエイ・パヤーは、「世界平和寺」という意味である。建立はアジア各国の独立戦争や内戦の記憶が生々しい1952年、仏教の国教化を図るウー・ヌー大統領による。そこには「世界大戦」の終結を祝う気持ちが込められていたのだろう。



寺は上から見ると五角形で、5辺それぞれに洞窟形の入口がある。隣り合った入口の間の壁には龕（ニツチ）が四つずつあり、ミャンマー各地と世界各国の仏像のコピーが、一体ずつ納められている。

その配列は仏教発祥と伝搬ルートにちなみ、南東口から時計回りで、ネパール、インド、パキスタン、アフガニスタン、バングラデシュ、スリランカ、カンボジア、ラオス、インドネシア、タイ、ベトナム、中国、韓国とめぐる。

最後の日本は富士山や五重の塔、東大寺大仏殿の背景画が目印となる。仏像は

法隆寺のコピーと書かれているが、左右の手の印相は施無畏印と与願印で、阿弥陀如来。はてどこの仏像をモデルにしたのだろう。

寺の外縁をかざる「世界の仏像展」は人気がなく、参詣客はまっすぐ堂内に入ってゆく。堂内は鬱蒼とした森の雰囲気、中央の太い円柱に5本の木が描かれ、それを背に五体の

仏が瞑想している。印相はいずれも右手を地につける降魔（触地）印。名札にある尊像名と、描かれた木（菩提樹）を東から時計回りにたどると：

- (1) Deepankara Buddha 燃灯仏。インドゴムノキ *Ficus elastica*。
- (2) Kakuthan Buddha 拘楼秦仏。ビルマネムノキ、シリス *Albizia lebbek*。
- (3) Kawnagon Buddha 迦那迦牟尼。ウドウンバラ、優曇華 *Ficus glomerata* 。
- (4) Kasaapa Buddha カーシャパ、迦葉仏。ベンガルボダイジュ *F. benghalensis*。
- (5) Gautama Buddha ゴータマ、釈迦牟尼。インドボダイジュ *F. religiosa*。

(2) から (5) はバガンの遺跡でよく見る、釈迦と先輩を含む「現在賢劫」の「四仏」である。バガンの五角寺では第五の尊像として未来仏である弥勒が加わるのだが、ここでは「過去莊嚴劫」の (1) 燃灯仏が置かれている。釈迦の前身である修行者スメダがこの燃灯仏に礼拝し、将来の成道を予言される場面は、ヤンゴンの寺の壁面やジオラマで人気のテーマだ。

ところで「劫」とはサンスクリット *Kalpa*、パーリ語 *Kappa* の音訳で、「カバー」はそのビルマ語訛り。極小を追及してゼロに至ったインド人が考案した、悠久の時間単位をさす。

したがって寺号にある「世界」は単なる空間的概念ではなく、時間的深みを含んでいる。その証拠に、柱の上の棚には「過去二十七仏」が勢ぞろいしているのだが、名札に拠らなければ区別はできない。

仏それぞれの「菩提樹」はインド土着の樹精信仰と結びついたもので、各仏の後見者であり、成道（悟り）の証人のような位置にある。仏像表現が禁じられていた時代、その代用として重宝された。

ちなみに釈迦（ゴータマブツダ）がその下で悟り（菩提）を開いたクワ科イチジク属のインドボダイジュ *Ficus religiosa* は中国に自生しない。そこで、葉の形がよく似たシナノキ科の *Tilia miqueliana* が代用され、日本の寺にも「菩提樹」として伝わった。近代になり、西洋文学などを通じてセイヨウシナノキ (*T. europae*、ティユル（仏）、リンデ（独)) が知られると、これも「菩提樹」と訳され、シューベルトの歌曲集『冬の旅』などで親しまれるようになった。

五仏が背にする太い柱は中空で、中には暗褐色に輝く Myat Swa Payar 坐像（図 1）が安置され、狭い空間に善男善女が詰めかけて熱心に祈っている。上半身に金色の装飾をつけ、頭上に王冠を頂く現世的な姿は、密教の大日如来を思わせる。飾りの細工は丹念で、

なかでも素晴らしいのは唐草模様を立体的に絡めた金色の光背だが、とても模写できず、挿絵では省略させてもらった。

境内のすぐ北側には 1954-56 年の第 6 回仏教結集^{けっじゅう}の会場となった、人工の「洞窟」がある。だが仏教国教化政策は、宗教の異なる少数民族はもとより、仏教教団からも支持されず、寺の周囲に僧院はない。1996 年には国が中国から借り出した仏歯の展示を狙って、犯人不明の爆破もあり、すでに受難を経ている。それはそれとして、屋根のついた参道は占いと土産物でにぎわい、ヤンゴン市東北部のランドマークとなっている。

参考文献

大野徹（2002）『謎の仏教王国パガン 碑文の秘めるビルマ千年史』NHK ブックス。
白石凌海（2010）『仏陀の南伝の旅』講談社選書メチエ（過去仏に詳しい）。